



孫家奇人傳

下



5  
2766  
6



2866  
6

續俳家奇人談卷下

白井鳥辭

故為當 竹内玄玄一遺編



白井茲右衛門ハ上総玉埴生郡北引邑此人を口小並ひる此家  
家なれども人此は免少よりて金山平巨萬の杖と費  
やいなきに思ふ物々杜業や〜家督をゆづり世は  
社不遁る柳居をゆ〜名と名殊〜ひ高柱と号は松家  
菴二世の宗匠〜免〜所不務もわ〜り種中し〜ゆ〜ち  
小思ひ切〜る野中〜玉柳や不髪と捨不捨の上〜家は  
と中〜る時〜我ある〜俳〜れ〜そ〜死〜中〜小〜日〜切  
〜謙念〜懐〜る〜人〜不〜庵〜を〜出〜る〜十〜日〜紙  
〜〜〜も〜る〜つ〜れ〜あ〜つ〜人〜の〜と〜出〜〜〜〜

改定画 山房

くもくも ぬれ  
千鳥のり  
るや雀のし

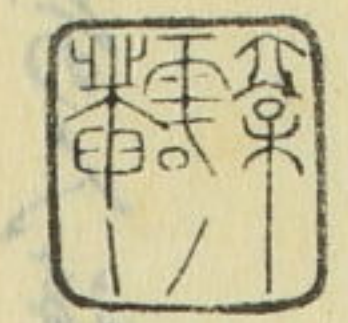
木柳居

香碑

ちんちん

居る川

月乃



志むる小泉川の娼家より在る處と居のれる坊主客れぬ七日  
居續けはとさきたちおひきく呼せし意利ありとあたまを  
たぐひおひき帰庵はさそつた左の鳥の鳴打よりいふおの  
習せられし目比の気憤より似合はしとせ先問ふに我れと  
控置にゆけるは嬉しととともお涙をこぼる時公にいふふり  
無き乗とて居つけしとてお控る無きとてお控る無きと  
るを幸ひ降り来れりて平控とて答へるもをり

山口系路

山口宗秋江戸の人馬海人といひ次第歴々と号はたてし酒巻  
小居一瓢とては是れとては古後を誦しとては禍莫大於不  
知足福莫大於知足と若くしより業のせめて一流の宗師と  
なりしといふ又双六の妙手といふは人にむかひて双六の勝負を

いづれのもよりせむかそくはけんと打登りかありは後人と  
 おべういびととくくもあこといふべし或るは後立れあり  
 た緑町ある庵のほりらふ我いたる琴の心とこのはこれ学  
 と其琴と弾くあまとせしど又多藝なる佛徳の伯父素堂  
 子にまらびはく風流の既す所の殺せし時後身おほあま  
 後のおをうかご吟せしむあられは老八十二歳にしく世は  
 去るふつ人箱戸が返俣集れ申あましく室曆の季夏晦日乃  
 夜未兆命は控ひて改か二人合れて交をしくみたりりては  
 菊も茄子ゆけゆくつ附すも今いひしと後くりかご記  
 しく又生あ友とられ向ぶりとあはさり教入や積るおひ  
 とねをん種釈者吟柿は六ツ藝をあり十二夜泊値耳  
 搔にき極がある花卯本白雲山守の慢改もてる異なる

種琳「高まれば夜はあし油て時を百里松島や揚名のお  
 風りゆる教雨ゆはられ松の音きくあつさ氷花香れ  
 春の大ききさり梅の花祇法梅咲や之所あまど心く物  
 泊洲花に杖はく果し身も撓ひまを妻来月雪を味  
 ての事よ花さより紀述麻れねのともぬのいまをわと  
 乙由たつとと引去むされ月えう宗瑞虫干や葉ふ時長  
 小多り合る光狼の地大狗おはととや境をけいさうや  
 日ハ焼しを捨くゆく柳居何虫の面敷あまむ枯野うか  
 米仲大和路の端とあははや花さより澄く新月や海成  
 ちかろし一帯琴風壁はとく横も廣く花系書我  
 吐さるる夜とん成たり虫の糸糸泊涼甚そ満ち月の教  
 元はとて貞佐懸坂が長刀あがるおね夜なる光氣紙籠

男がまゝくちせり 詠波 加ひひけり 猶も八十八夜を 赤金の  
翁をあのが裏の花をうまは 二句作者おぼえは 折く所の云いどし  
ていとうりかされし 記したる時 年切らうてれ 名家多うるも  
海とやあるるうね

紫子春來

紫子春來は江戸の人 六益仙と号し 正月が來さる 柳下下結  
の江田家元日見るが おと 名月や花あきま 夕比並尼  
あれ古今れ 妻うはと 志気んはりと 女より出て 秋の正花に  
おと ころぞ 働きある 自らの今花の一字を 二季く みて  
優りに 正意と けり 無と とき 格別のを 紫あは ばや  
米仲う 記す 小春來は 小春眼女の 傳紙 樹物 して 見け  
るが 或時 賛し 我恋ハ 秋也や 達磨を 仲人 して 其のう 記

小春下しも ぶな 又ひと 日我庵に 来て 是をよと せし 詞書  
に 巻く 田舎 小娘 ころ 山風を げき 秋地を ちう 伏  
ころ がつ の 男 小春 小袖 小火の えつ き ぬ 巻こ ちん 瓶 や ち  
記よくと ちきり 小春 小娘 小春 小春 小春 小春 小春 小春 小春  
て ち  
ころ 公 ち  
よん ち

慶紀述

慶紀述は江戸の人 道と 祇堂 ちう 侍と 備極子と 稱し 田時  
菴の号あり 隆佛 小春 小春 小春 小春 小春 小春 小春 小春 小春  
賀に けし 上 小春 小春 小春 小春 小春 小春 小春 小春 小春 小春  
し ち

棠之間が年々歳々花相似歳々年々人不同とのる初句成威  
 一と佛社の愛易を思ひ終りまうと新作と極とと棠  
 苑集或玉河端と若くは人の笑ひを求む後亦存我買明若  
 ちり是とかりし極を今江戸佛社と稱するは其の人と若く  
 其極聖とひしれは一時流行しく故をえりも遂ははくも  
 つく若く極るに盈れを虧るは易極ををえりもやま  
 きりよあやうたる極をありしとわ時と秘書監鳳若先生  
 その風流と極るの初あり稜々逸氣好風流閑座清吟能  
 解憂水雲月嶺幽栖意四時常作菴中遊とまて名譽あま  
 佛宗極法

祇園江戸の人祇園にまゐりて自在菴と号し常は佛社を  
 一と日奈やとまゐりて死さうあ人をまゐりて花の山

一夜更その日れ共はまゐりて一或時點俗あつた かつりて醫  
 療とあふりに醫とあめれて一六月面のうり一後然を  
 うか一年分をあつてつりて一思るのつと初るや極れ初の  
 漢華のやうなる思詩を初が息のあかり一水里遊  
 如く身と投うち其居はけみ帰定の初極あひるにさび  
 ひらひと意はあつてもさつと一就このつと初小題と  
 歎くあつて一祇園使ちさむひの老とせせとあはは  
 一旬とそと一若くはあつてか先をうあがれ極あれ思詩を  
 の息佛名若古兵庫在極女紅梅あれ之彼若若若一旬年  
 心を翻へ一若くはあつてひらひとさつと又別荘と實變言と名  
 或日合歡老人極 若くはあつて一若くはあつてわかけはくは  
 本垣と治洲と雲風紫等もあつて無つて一と一祇園若

つ子ふつとく百季詠の向今時の調より今れ調何ぞ百  
季の後不舎ひやと是時世の交革を初れりとのべし

西橋妻

西橋の江戸橋妻より此に佳人ありて夫婦とも佳話とし  
たり或夜いづく言ひし西橋の妻のこの佳話不調市を  
依しく出ゆえと此妻をうして出あつて我子あり依りて  
扇に夜の言と風流の為情をのむはれんぞちのれ一人内  
とて是不依りて更なるをれ冠雲の一言れ日やあれも人乃  
子橋初りひと侯伯より世知るも亦奇なりはや

皐月平砂

皐月平砂の江戸の人貞佐がつ子と其以の物語ありて人その  
乃乃荆棘とくふふあふびとりのありて頗る和漢の世平流  
りて或と此句のあふ清國の先帝對聯れ文小日月燈江  
海油風雷鼓板天地第一番戲場堯舜且文武未莽操中淨古今  
来許多脚色といふ紀号をゆれ日本天皇の御代ありて  
ありとくけり一月雪や隣の花は秋跡如來ゆと左傳あり  
権が子をかりひりかかれと母よりよめる秋か史記陳勝  
が傳説あり子金の垂やふちるや花れ友その作棟小裁  
るもそ家ありて著以不の而耐集巻はつる續而耐  
集いまで都をい今の平砂が都不傳ふ

中村鼓石

武州埼玉郡吾妻村の里正中村を名乗る駿河の必司式部少輔  
後原一氏八世の孫と少なりとより風流の道不似てはしむ  
は下免連袂と好く時亨其河かふ交り後能年かす

句盆供

右様くしと考棚をり少事おはりの  
なほのくしと考棚をり少事おはりの  
なほのくしと考棚をり少事おはりの



墨ぬり  
坊のうし  
そらうか

庭男 平砂

九三十六句

なまののまへや栗枝りり枝  
なまののまへや栗枝りり枝

なまののまへや栗枝りり枝

燈明  
心切の利劍  
照之法有月

築物  
西きま  
初乃

挽茶  
甘き  
初乃

牛  
初乃

比也  
比也

比也  
比也

比也  
比也

比也  
比也

汲水  
人のひた  
あひる

汲水  
人のひた  
あひる

汲水  
人のひた  
あひる

汲水  
人のひた  
あひる

宝曆六年丙子年五月蘭盆會

會供三十二有六句

葛之葉乃裏

毛問波

也箱位牌

馬  
具祭

飯  
具祭

供物  
具祭

挿華  
具祭

比也  
比也

比也  
比也

比也  
比也

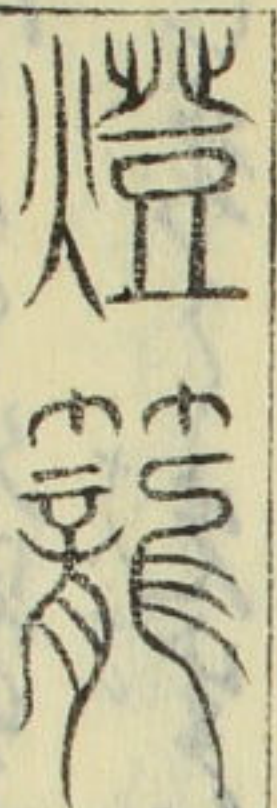
比也  
比也

祭  
具祭

祭  
具祭

祭  
具祭

祭  
具祭



多女す  
あひる

部類眷屬

無縁方更

送火

漂々を施餓鬼幡  
おらりて一人八立と灯籠拵

續非家奇人談

卷之下

六



橋川百菴と交り雅志と教石といひ庵と葡萄中といふ  
山茨ひ谷あつて雪輝る大の肩とあつたに表のも  
らちや誠告吾山とゆふおふ持来るといふ人の校讐氏  
乞こひひとせは戸出のや一河竹庵と評す年皆山上  
を傳へて父兄の道に人悦びはくといひく世人喜物と  
りて来り先生とやまふおの志史所著る中あはれ  
いと所へりてちるくむ吾山論と人喜物とりて  
来ると物中あはれくこれ我智の石号と補ふ慧人あり  
教はげんはつるべうはつと人口と受て是くそつは本核物  
或問金花石葉集桃借原道をいひまごせおられされ初  
若くしてしひつか天明年七月お返り辞せ一葵里か松  
や哉とせお縁

誠谷吾山

法橋吾山の武の誠谷の人ありしより江戸お来り柳居  
たよりく徳子とゆふお沙死てよりわらう古調おはれおを  
て蕙風の顔とえさう号と沙布とつるも竹の曲あるとゆふ  
あつむ其人がしとをりて一年れ兼且お一おる日れ縁乃  
あつむや初りのひみ向梅と優よ大くいはは文選お天地  
萬代之逆旅日月萬代之過客とつるおなれ是菊斗公より  
飲中八仙のわくと乞な中へるは御下よるおまを智章と誠臺  
のわらうとまひや昔清お汝陽王と日れ乃や延もあつた東  
うし左相と千金の氷室やせ先て吾れ味宗之と冷天と我  
物ぐわのはちひうな蘇晋紙お名拂子蠟もはりて校もこ  
び李白といふぐに舟とまごせて凍る麻張旭と文彦や管

とくさるゝ雲れ色焦遂成「市中乃人」とやうや襟の夢  
始先仍御しそ英流の國福傳の舞とあゆるに何なるの  
そしむの教人のあねみ能社所あるより一巻ふさの六一能  
能しと通るべしと折る時考のあはば一我とを色ゆる  
さぬ舞や布とぎに晩多能社米葉と著し蕉翁の能と舞  
しそ先輩の来教とあり又法方云物致林呼わはあらふ  
八皆人れりそゆとふ西と世紙舞はる吟「花とるん」實六きのみ  
そ本のお

五行坊

五行坊琴た尾洲の人能宏を庵元坊より傳り流風よりそ  
一時小唄る傳事仙と号し「日本」の所小唄の「就月」作向そ  
分別ハありそよの月或時彼小唄のり我手携手のり彼が

河年  
同

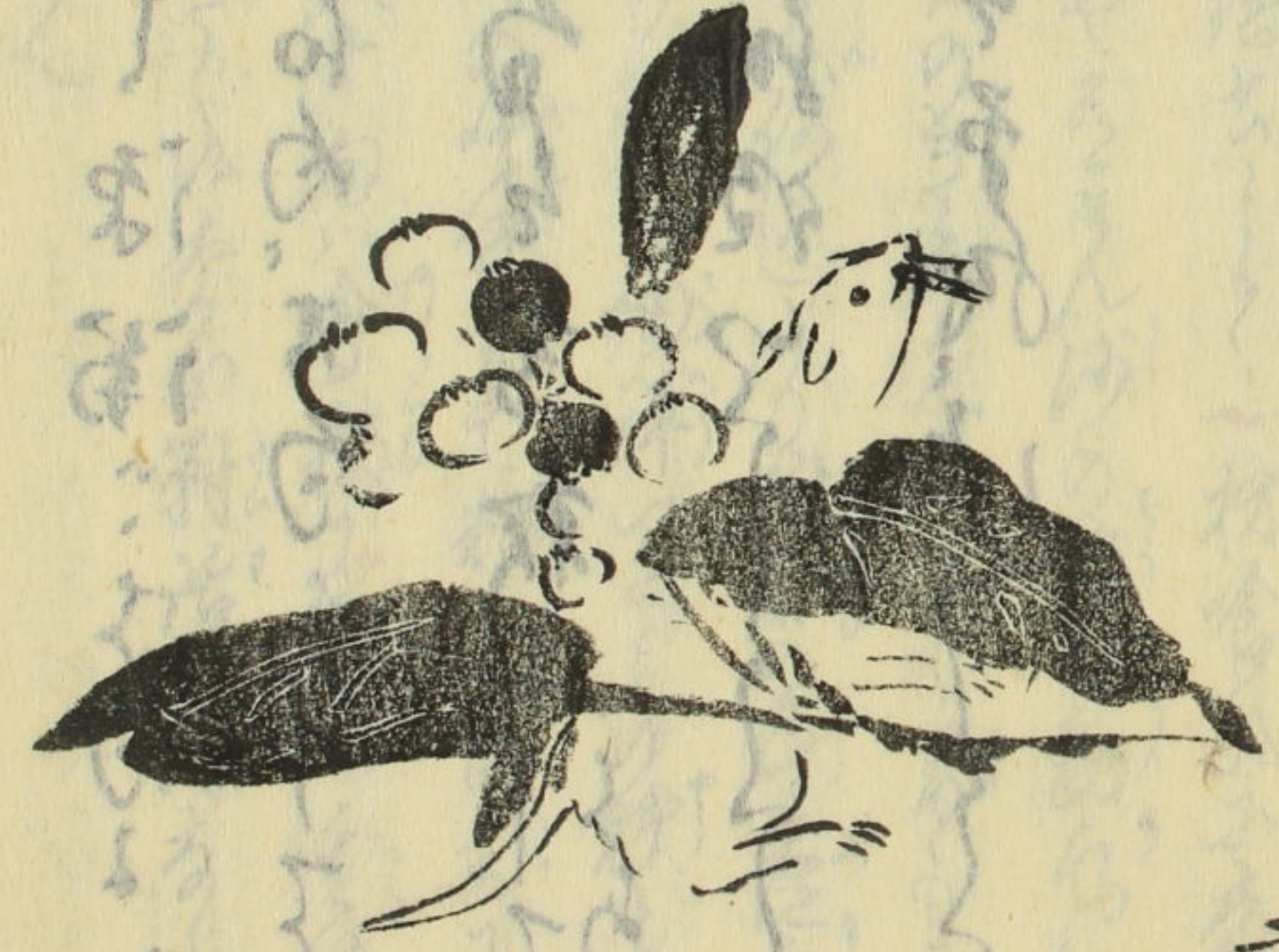
泣  
あつしの

枇杷

こよ

るま

やあはら



るま坊

古所ふる八俣く坂細海く〜  
 ともゆあ〜し凍浦く〜句〜し〜  
 以深く〜るきて百内、古句あ〜る有心  
 あら物〜十句と今新〜して  
 色く〜るりて細波く〜く〜く〜  
 活の河く〜たらず海く〜く〜く〜

活と我ふゆぐり我が勝手と彼ふあつけば世八只をう〜くを  
 亦はび〜くゆ〜んと端去〜く〜材喰ひふ来る〜か〜乃  
 是理うか〜年何変るやあるん河の傍の動氣と驚る〜く  
 とも志と愛せは昔実のきまえあり〜るもあり河の地  
 来と許さる〜く〜人何じよう附合のり座元坊回ある  
 返去り附方八俣のありむき細波く〜く〜秋よのまをあら  
 そ備はるの向ふむ〜村の味もて移る百句はけ句を〜を  
 有る附くちなき物八十句の今秋〜く〜を河〜ら〜種  
 名ゆ〜細波く〜が〜ゆた〜対活の時あり〜る〜  
 冬〜が〜ゆた〜と〜

玄武坊

村上氏八邊と業と〜江戸釣込山下おはれり徳名〜

玄奘坊といふは統の唐元坊より統庵朴師小傳りり朴師より  
 傳りり此坊ありり「あちちより來り後れハ初く氷うな」門ハ  
 我部とそりる深きうな「曰くけあハりそりて也るう」雪の  
 淋「この雪くまのる如虫の毒」身とせして小使不出る  
 うおとのれ死せしと人の風吹はるを「死を程ふ所うを  
 一」花の素淡く死を程ふと「來りる人をもめて」そ  
 よりも死を程ふ氷れを打うるつ子の刺髪するにをんをそ  
 三子の愁も有り「建夜之字の意は」只其が別小刺  
 あちちよりふと「赤」缺盆骨はてくやむか  
 中その調寂然とく「味ゆも法一流を構う」其  
 此道づこりり所れが世の變化流行るんより「易古不易の  
 社」托んあかどと「死を程ふ所の誠は」松の色わらじ

尾の大竹坊より文書に來り見れば「けうくさりき」唐元  
 史の既「殺せり」とき「あはれ涙を流す」此ハ今ハ紀念とされる  
 三頼の一袖小むりひて「百合のそり我よりむくおハ年」  
 つく何ぐ「富有り」た小佛社の資助と「旅」人ハ或は死  
 着業のたされ「く」状は「あはれ」度の有るを「諫」ま  
 佛社の部信と「く」も本忠孝の「や」けを「か」り「り」り  
 社の「意」ハ「あはれ」我「及」れ「あはれ」は「く」つ「く」つ「く」つ「く」つ  
 師弟の「切」り「又」あ「法」度「佛」社の「あ」ら「は」れ「あ」ら「は」れ「あ」ら「は」れ  
 つく「不」命「く」つ「不」傳「承」を「あ」ら「は」れ「あ」ら「は」れ「あ」ら「は」れ  
 て「あ」ら「は」れ「あ」ら「は」れ「あ」ら「は」れ「あ」ら「は」れ「あ」ら「は」れ  
 何「れ」を「命」せ「く」つ「く」つ「く」つ「く」つ「く」つ「く」つ「く」つ「く」つ  
 や「今」法「の」一「流」を「後」世「に」傳「へ」ん「あ」ら「は」れ「あ」ら「は」れ「あ」ら「は」れ

續佛家語

卷之十

十

あがうとさうげせけりしも尚耐ふおいらの犬導ゆりやを嘆  
ぢぬりのもあつり

鏡門曉卷

曉卷ハ尾州公の藩士之江の徳徳と英法の何某あやむ  
びしゆや、意風の額と感泣しし一風と記しおろし花の木の  
号と物せんと思ひ立し一箇の得るこあらうと君の勅代と驚  
涙へたり程多し先ありしとたり此後居と許しん史より  
名古屋の町に移りし昔雨巷と号し周舉とも認つとも  
稱せし一振袖の大和のたりし日の初め一徳ゆれて有しけ  
の四月ハ一本の喬木の末や花本董一曉や録のりゆりお  
の海老小垂んとしるはつとを換しし一書れ清比小松小賣  
曆中よりこのく小橋一松島と一見しと一隆興殿の原産し

千松島とせしが其海いまで佳境小のつとそ此の穠密に  
を合るもぬ和申あまびゆし一松島や果はうりし夕あつめ  
と何公を此一海小初め揚りししつとも爰に感泣ししつとも  
何れのとくや越えせしつともお進殿下小呂れ参殿付しつとも  
あつし一あや侍ふ早の海氣しつともお考その名ややくと  
おきし不自ら海をしる教向一書所おし路の公をあれしつとも  
一登と長ふあらや庵の古燈をて一燈籠のたふしをれを神印

谷口蕪村

谷口蕪村ハ別姓與謝名ハ長庚字ハ春星三果東成と号し常  
に和洋の古小就く稗史小説をも海らびしつとも史ありし人  
と故り磊落しつとも物小拘あはし時し女学伎藝よりて公貴小  
史りしつとも礼法と正しつともとたつて己が産業ハ漁獲と史

うらうら水居小菴居士妻子はや一たふ小鏡を時出く網  
 うら砂とじし擔い去く於の市にむく帰路酒を賣ひし  
 みくゆ冷ひくふ一三椀の雞黃かやるや長者振風姿卓然  
 「妻の酒をぬりぬのたうくく悠々無涯」花日破く帰るこ  
 烈し名拙子洒落自在一靴桶とあれしと樹下に坐几る生生  
 清涼一を何り飛ぶ留士の裾野の小菴より譬喻無比一くく望  
 有あくと漱おきむ存げや一取西上人更得其趣一絲賣市小  
 刀とありはる一守守や乾煙れを刀鞘の持共意氣揚く徧知  
 其成人自然に好む水の滑稽その楽地とるる千載の下り其  
 人ありこのふべ一又画居以謝寅とく初め漢画より今後一  
 と記し世の人の知るべきものひくく高時大雅堂と伯仲は  
 や平安の淇園先生頻謝蕪村江村之圖の行りよう一を額と写し  
 けら述より公ある若く求めんくその人の生来を知べし

蘭更居士

蘭更居士六藝と業くく京於小以火り屋と加賀れ希因  
 ゆあひて折かゆ他席とも立ける時小尚く蕪村曉庵が  
 どれ名家よけおされしや一年月とおくる或く一加賀の何  
 某きくく今暮曉のあ権以て小投く一近玉小他社の標梁  
 か一汝居おんしきせんくく時のいれると初しびやと有り茶茶飛飛成  
 庭下小投中くく一軍史大ひ小舞て女成飛り小くくむけく  
 より於都小隠れる此家家河と小飛りし一いけや煙れ中一  
 梅のむ一日の秋とおけく移むる堂扇か一枯河の日ふく  
 とれく流流述述くくむく世東東玉玉河河の途中中信信濃濃の玉玉の流る  
 鏡鏡在在何何来来後後く許小旅宿宿れ折くくかてて持持修修く一古

世画をんくふ中不蕉箱自筆の契れ相違成とくくろ諸國  
 の門人多う中不蕉の少枝が向ふ此とつうと人の居ぬる事  
 不蕉の筆とくくろ枝が向ふと公裁せくる聖物とくくろ  
 あつたの尺附く大ひふをりきまよりむ先垂くみうに人  
 尺せけりもとくくろ

渡邊岱青

渡辺源右衛門尾陽の藩士とて代々幾許の孫とくくろ  
 常不礼葬と好く装束等不念法いやとくくろ  
 賢不居く晏如とくくろ被揚旗が操とされるあつた  
 曉登り門不入くわ老孝と号し「梅ちりく」花のをいふ  
 うに「時考又時考」その秋ハ長く「宗峰有老坂の松不隠れ  
 多し一本枯のさく地不鳴く」は折ふ「佛造と殺る不活者

とおひる代とくくろ已く庭中の去成棄る府吏五六人  
 て泥土をそらび出た時不佛客あまの席不除くいと見  
 子建にゆく今日の佛造何の風情のほ庭お不曉法とくくろ  
 客人の無不佛くねと徹くや不幽くれくくろ又何く自佛社  
 しく宗物をせむむとくくろ不物や不圖むひゆく已く  
 り持佛くくろ元少せつをぬん息清くくくろ人せんくくろ  
 庭くも来くこれ物入不あ向くはく常念とくくろ不異  
 興んとすん常不老ありとて何ましくくくろとくくろ

井上士朗

井上孝庵佛名士朗尾尾別名古在形町不任以事より物不拘  
 ざれども苦実ある其性之あつたくくろ以より医術を勵む  
 勢いとくくろ毎朝く起くつ人は調合を已ハ別席にゆく

りかこれ病人と扱ふおろし法玉の強客つゝい來く桃傍やむ  
 時なきも其機ともしあありあゝとや人の及ばざるあり  
 せよせ水の不庭小菅れ來りゝと庭掃のどのこの若るお  
 黄考代りさほな梅不垣けゝ伊勢の年居直志あの花乃  
 浮村まをめで文世の性來ゝんはも或これ沐生に來り  
 扱ひくそはごりいふゆるゝと松坂のまつこを妻乃こ  
 まりあれはは氣おろろゝと樂とせしあや現選とて  
 志づゝと月のそ大和の玉の行術を以飲火山いつと耳梨  
 ぶらとれどと存のりゝ江のあゝに撫まれをを呼け  
 くのうゝおまうらむのうゝとこえとこいそすどさこがむる  
 氣もたうれば世人も耳なり山は落葉松花月一雙の控ひ  
 おろれ日も既りゝられてあもはや一瓢の酒の残りびくなく  
 扱られと花世と一瓢著ぐ輪おろろと承られ平生執成  
 けろろと人子自賛の句一甫を月夜南を若時由新印と何進  
 の年とや病にゆゝと一足る事を初進や田標の院住居られ  
 終極と扱ろろ初免岱青が同僚を清く紅糸乃安成  
 りよゆいと算たぢらおろろと不席上庭中おろろとあれ紅  
 糸とちして只小神を忘けるがおろろと容おむひく句  
 ちくんが事あかれ士朗はと入る答くを一字の教向  
 出ちや教りゝちの人蕉而小八菓の号を橋る文小霞の松小葉ひ  
 常の梅は菓ふとふ月のお小君の衣小菓小日も若く風靴  
 と履くあふ時と連や時浮葉によせくる花いみあこの菓の  
 か菓と程向れ菓守と並けりねとそその衣葉向と無きり

川上不白



川上不白（不白）は姓ハ辰東ありて先祖より紀の新宮侯に仕へり  
 已十六歳の妻より東河の越さ千如を富め就て茶のりとな  
 るび宗君と初名し日夜の琢磨めそのたれ繼奥をくく  
 就就にゆきば子おの風流弘ん若ハ海よりあはば有へり  
 いぢや身と立名を揚てて一積立るま隙く沙の秋風あり  
 て帰るや東人と餓せしうふ出く江戸へ帰来し惣雪蓮花の  
 二菴といふありてよりを化法今お并くゆりある是の僧が  
 切丈はよりて抗りし不養菴不白といふるも陰羽居士が唐就よ  
 り取て来れるぞ又古を号ぶの風流なる成は孤塔あり奇  
 田形奇ありこれ諸号あり時の帝孫白殿日光流宿宮も正の  
 されく茶のりといふをりれしそ名養菴ありてそ次の大智徳大川  
 菊輝無學龍門菊初大願号と友よりそを介菊榮山乃

湛江和為本方奇の目録上人ありて出入宗哲深意正玄利秋  
 が飛鳥ハのちも又又飛龍を好くありし以の治洲ありり中比  
 陸雄よするあひ老く夢をいせりあるあれ茶のりをたしむれ  
 かこり一季宗雪と嗣子宗引お矣るそそ「漢葉の末葉あや  
 ぎよ子代の妻曰く菴茶湯の合はまりし時河よりて君乃  
 階出しるるを「陸君れつるも茶湯の花香るる振く夢夢はあ  
 そびるりしか君の初めまご蒼居るりし花の初き日の花ぞ  
 うあつりいつしう思いで中とあるこれ「とく嘆と君のいひけ  
 ん夕橋とあるるをいぢや初橋のんと眠る茶葉の二子とそを  
 ひ又その言の不夜通して「雲君とゆわはるるの山あり秋を  
 をわらふぬ日をうりあるふ海松奇（徳量）の室おいさる菊乃花  
 いらくか初と歳とくくく祖居を久藤の茶湯ありし





藍田西 不名心 處

切 陸



Handwritten calligraphy in a box, including characters like '木' and '物'.

Handwritten calligraphy in a box, including characters like '物' and '女'.

Handwritten calligraphy in a box, including characters like '木' and '物'.

Handwritten calligraphy in a box, including characters like '物' and '女'.

教訓として存義を教ふる事無くして西宮に坐りて史より乃不丹後城  
抽く他の奇境は入るる事無し

春秋菴白雄

白雄は江戸馬喰町の菴菴る湯の邊り小僧りりと佐州松代の藩  
より出でし人少く深く姓氏を匿して偶たゞの河久人なりといふを  
そと徴察しし事あるのみならずしとを初め松露庵烏明の  
門小入てそ次は春秋庵烏明とつるる烏明、佛語の一語盡てこが  
るる適ざりし事一とを忽志と翻し、家小離伏せし事れし  
つゝするを悔し松露庵と改名し一家を去る小冬の日集のる  
洞とひくまんとそ後と定め先名を白熊とあしむ或は古く熊坊  
とも稱せり尤も勅諭等々建の吾孔菊の附録小そ次の志折を  
尋むる評する因小田あり熊の國と感せし兵革と傳するもの

人と和すまの玄澁ありし事此傳あるるこれをもその小評多の  
英士と出せる事せしむる事なれを流し人知ありともいふ事ありし  
又秘制の癖葉し名付する一書ありし事ありし意門の論は自己の  
一見識と出加しし事志とんる事異なる物も尤も此書のその被是難  
破おこする人もありし事も是非の褒貶は姑く割くべしはむり  
の貞徳の遷るる所傘と云ふ松平河うの敷百々奈の異人と志す  
難所傘とありし事あり扱ありし事難く清浄なる一徳も天明の  
好むる人として白熊坊も折く上宿しし風雅を知らず事ありし  
親しかりし事ありし事あり甘旨を言ふ暹羅の日紙後の編め此  
人來りてさ海への新織たをなれし人を探しし事ありし事ありし  
目にもせし事ありし物ありし事ありし事ありし事ありし事ありし

其坊ふやわくすべしとてやと裁ぬお若お命じく仕立上るる月  
 客坊飲びせくさゆ糸く打たるくよりかろく後甘岩うのふ定試  
 うり上は統くまの酒屋の曠りもなきたりかまのつを城ふもる夏の蝶  
 の表秋とあくねとありつを我ととも亦翌の日を殺すくは言やん  
 の厚志とりて我おまのうり一夜うかれをせくく若くはん  
 我心と憂るかいうく酒屋の目とくんやとを殺すおまおま  
 更ふ後重なりなり甘岩も庸人なるゆをいう中も我あやまうり  
 せくくそ一夜おをせらうをみる酒屋をてそを忘お後を重るる  
 又客一橋の行もなきて菊屋腰膝るのり屢く門人二三子ん  
 と合さくそ号と助んとて二園の英令と借るかそ後日も通う  
 吾陽と重なる彼くそ例の人々来りて様拂ふかかくの柳より  
 ちこと落る物もぬくみるか先お借るこかのおおきうくも  
 一と訝とくふ坊が白そ一おありく一我化けりりゆるくが  
 懐小せんも果をく一そ修重んも酒屋人のおそれるく人のお付ま  
 一き出棚はかくして出りくうく先うく先く控び四六日へく  
 帰られ酒一重るるを忘果くぬも出さくしりよりか再び揚を  
 けりるくゆくそ飲ぶと人々も扑て大きた笑へるとぞを酒落  
 かくの如く寛政三年亥歳九月十三日没多六十三品川海晏寺  
 小暮るるを走冷と捨ふはあ門りて一園の戸やああき被世し  
 あまの風実登暮れ控りゆりゆりといふ承るる一志のまの  
 浪もくくく白髪首七里がを中かて一半の脊小酒ありか  
 ぶは花を桃狐島の人臘月二十七日の夜を色くく我をこのあ  
 ちてけくくも又あふくくもうる商人その風致亦一手あるりの  
 日そおのせらる

一と訝とくふ坊が白そ一おありく一我化けりりゆるくが  
 懐小せんも果をく一そ修重んも酒屋人のおそれるく人のお付ま  
 一き出棚はかくして出りくうく先うく先く控び四六日へく  
 帰られ酒一重るるを忘果くぬも出さくしりよりか再び揚を  
 けりるくゆくそ飲ぶと人々も扑て大きた笑へるとぞを酒落  
 かくの如く寛政三年亥歳九月十三日没多六十三品川海晏寺  
 小暮るるを走冷と捨ふはあ門りて一園の戸やああき被世し  
 あまの風実登暮れ控りゆりゆりといふ承るる一志のまの  
 浪もくくく白髪首七里がを中かて一半の脊小酒ありか  
 ぶは花を桃狐島の人臘月二十七日の夜を色くく我をこのあ  
 ちてけくくも又あふくくもうる商人その風致亦一手あるりの  
 日そおのせらる

大島蓼太

大島陽喬（名）蓼太と云空摩居士と稱し雪中菴二世の家  
沙（名）ちう（名）ちう（名）二世使宅沙の傳燈を嗣（名）つより（名）苗も乳物と云  
こひもこより後を苗洲（名）の門人數多しと云枝と曳（名）幸に  
身縁（名）多し原の白浪福沙の麿尾下に丹田を煉（名）事多誠  
積（名）く遂（名）に室曆己卯の冬免許と云ふを書小曰大島雪中破  
却兩重関所謂隻手與音聲也云云又安永乙未歲陽門人  
蓼太の他（名）ある所の一向と云ふ來船の法人（名）示（名）以（名）空譯士（名）小松  
それと傳（名）くく大（名）小（名）俗（名）示（名）非（名）と云ふ手書（名）一帝（名）と傳（名）るを  
一章（名）小曰

撒密他列耶阿兒要披捉革尼麼子那次吉 蓼太

蓼太先生者隱君子也都人士以為金馬侍從之流亞矣 中畧

蓋僕亦有所感也因賦一絕寫其意倣顰之誦所不辭也

長夏草堂寂。連宵聽雨賦。何時懸月色。松影落庭前。

乾隆四十年孟夏月望後三日雲間程劍南

又安永丁酉夏蓼太向集（名）を刊（名）しを序（名）の他志有歌子曰東都  
蓼太以善俳諧歌聞于世（中畧）有是哉昔者晁卿與唐人酬和明  
人著日本風土記載和歌數篇然則彼知我有詩有和歌矣蓋  
未知有連歌也而况俳諧歌乎知有俳諧歌者乃自蓼太始（云）  
思（名）ふも清人の和韻（名）あつたるのハ祇（名）不（名）風雅（名）のめい（名）わくとをを  
以（名）て又南歌子の言の如く俳諧（名）あるのハ是よりして彼と國人  
も志るとするといハ一家の名譽何（名）此上あるべきや扱（名）すことありし  
昔の芭蕉庵の詠（名）といハ今ハ何（名）侯の邸内（名）ハ彼（名）又（名）これ（名）討（名）その  
回（名）字（名）のありと慕（名）ふ人（名）といハも委（名）く膝（名）と見（名）るのハ（名）か（名）の





*[Faint, mostly illegible handwriting, possibly bleed-through from the reverse side]*

今の世を愈々低減し号するも此の品あらむ  
 多とみたまはれしはこれ大に奇なり  
 その中は、この世をさるるは、  
 ちかしく方々におもむるは、  
 りふくち、  
 人のか、  
 古々の、  
 今、  
 行状の、

Handwritten text in a cursive script, likely a continuation of the text on the opposite page. The characters are dense and flow across the page.

絶家奇人遊踪

Handwritten text in a cursive script, starting with the title '絶家奇人遊踪'. The text is written in a fluid, connected style.

あつてはしるのむらまじゆらま  
清くは海にあらはれぬ  
あつてはしるのむらまじゆらま  
あつてはしるのむらまじゆらま  
あつてはしるのむらまじゆらま  
あつてはしるのむらまじゆらま  
あつてはしるのむらまじゆらま

書中より其人

未定

諸 國

尾州 名古屋本町六丁目  
尾州 名古屋水町上丁目  
勢州 四日市南町  
美濃 岐阜米屋町  
美濃 大垣俵町  
遠州 濱松紺屋町  
駿州 静岡呉服町五丁目  
駿州 沼津淺間町  
信州 長野仁王門前  
信州 小諸荒町  
下總 野田五丁目  
下總 國佐原

片野 東四郎  
堀川 勘助  
伊藤 善太郎  
三浦 源助  
平野 利兵衛  
齋藤 源三郎  
佐藤 俊平  
擁萬 堂壽三郎  
西澤 喜太郎  
相場 七左衛門  
茂木 林藏  
朝野 利兵衛

肆書

常明水戸泉町  
 磐城中村宇多川  
 陸前仙臺園分町  
 陸中一關  
 陸奥青森博勞町  
 羽前山形六日町  
 岩代福島通五町目  
 武州深谷驛  
 全所  
 越後長  
 越後高田吳服町  
 越後四谷濱村

松信善之助  
 志賀茂卿  
 伊勢安右衛門  
 及川兵治郎  
 柿崎忠兵衛  
 市村五郎兵衛  
 齋藤彦太郎  
 小野脩三  
 酒井省吾  
 中村作平  
 永多勝太郎  
 佐藤友吉

三府書肆

西京寺町通四條  
 全寺町通佛光寺上  
 大坂比久太郎町四町目  
 全南久室寺町四町目  
 全北久室寺町四町目  
 全備後町四町目  
 東京芝三嶋町  
 全通り二町目  
 全壹町目  
 全淺草茅町二丁目  
 全通旅籠町  
 全本石町二丁目

田中治兵衛  
 川勝德治郎  
 柳原喜兵衛  
 前川善兵衛  
 前川源七郎  
 吉岡平助  
 山中市兵衛  
 山田佐兵衛  
 北田茂兵衛  
 北澤伊八  
 東生龜治郎  
 江島喜兵衛

